

## 刊行にあたって

個人的なことで恐縮だが、私は 2002 年より沖縄をフィールドの 1 つに設定し、沖縄戦に関わる慰霊碑・慰霊祭に関する調査を続けてきた。京都府立大学に赴任してからは、地理学研究室に所属する学生たちと一緒に調査を実施してきた。その成果は、各年次の調査報告書にまとめ、またいくつかの論文で発表してきたが、毎年の調査を継続するなかで、慰霊祭の様相や沖縄戦に対する意識については、小さくない変化を感じ取っている。

2025 年は戦後 80 年であり、戦争のことを振り返るにはとても良いタイミングであり、それに合わせて本書も刊行している。本書は、これまで筆者や筆者のゼミである地理学教室が継続的に実施してきた沖縄戦に関する調査の一環である。ただし、これまでの報告書はその重心を沖縄に置いてきたが、本書は京都出身者の沖縄戦への関わりに力点を置くことにした。沖縄戦で命を落とした人びとは沖縄県民だけではない。日本全国から集められた兵士もまた、アメリカ軍との戦闘のなかで故郷の地を踏むことなく、命を落としていった者もたくさんいる。もちろんそこには京都出身者も含まれる。

沖縄戦に従軍した京都出身兵士の実態については、京都府内の各市町村のなかでも十分に知られておらず、課題となっていた。本調査の直接的な契機となったのは、こうした地域の声である。京都府内の各地域の課題に応じるべく、令和 5 年度および令和 6 年度の京都府立大学の地域貢献型特別研究 (ACTR) 「戦争の記憶の記録化と次世代への継承の仕組み構築」(研究代表: 上杉和央) による研究助成を受け、調査をおこなうことにした。80 年という年月は予想以上に重たく、その調査は難しいものとなったというのが偽らざる感触だが、幸いにして、ご遺族の何名かに会うことができ、貴重な話を聞くことができ、また資料をみせていただくことができた。本書は、そうした調査で得られた成果の一部をまとめたものとなる。また、調査成果についてはいくつかの市町村でパネル展示等を通じた報告会を実施した。その実施内容についても掲載することとした。また、2024 年度の沖縄現地調査で実施した宜野湾市嘉数高台公園に所在する慰霊碑・記念碑のうち、「京都の塔」「嘉数の塔」「京都平安之碑」についての写真測量による実測成果についても掲載することとした。

調査に際しては、共同研究員の奥谷三穂が地域との調整で中心的役割を担い、地理学研究室の学部生・院生、とりわけ廣野勝、藤田尚希、山下悠衣奏の 3 人が取りまとめや成果報告の場面で、積極的に取り組んでくれた。本書の作成に際しては、実に多くの方々の協力を得た。その詳細は本編で記すとし、ここでは個別のお名前については割愛させていただくが、皆さまのご協力なしに本書の完成はなかった点、改めてお礼を申し上げたい。

上記のとおり、本書は ACTR の調査成果をまとめたものである。ACTR の理念に鑑み、本書の成果については、今後も積極的に地域に還元、発信していきたい。

2025 年 2 月

地理学研究室を代表して  
上杉 和央